26. ^{11}C-flumazenil によるベンゾジアゼピン・レセプターマッピングにおける代謝補正の簡略化について …… 山田　貴光他 …334
27. PET による抗うつ薬の肺内結合部位とその薬物動態における役割に関する研究 …… 須原　哲也他 …335
28. ガンマカメラ法における線減弱係数の測定法についての検討 …… 新尾　泰男他 …335
29. X 線 CT を用いた SPECT の吸収補正――第2報 Chang 法との比較――　谷崎　洋他 …335

一　般　演　題

1. ^{131}I 大量投与時の過剰被曝回避――排尿頻度についての一考察――

小山田日吉丸　（日赤・東京都東赤十字血液セ）
内田　勲　小泉　満　（癌研病院・RI）

転移性甲状腺癌に対する ^{131}I 大量投与療法は繰り返し行われることが多い．したがって，余計な被曝は可能な限り避けるべきである．その意味において，排尿の頻度が多ければ当然のことながら膀胱内の累積放射能は低くなり，それだけ近傍組織への過剰被曝を低減させることになる．

今回われわれは，^{131}I を 5.92 GBq (160 mCi) 投与され，体内残留量の推移が $Y=150\exp(-\lambda_1\cdot t)+10\exp(-\lambda_2\cdot t)$ で表される症例を仮定し，その症例について，ふたつの排尿様式，つまり2時間ごと6回につづいて6時間ごと2回 (排尿様式 A) と，6時間ごと4回 (排尿様式 B) の排尿の場合を比較したところ，膀胱内に貯留した尿からの被曝量は後者では前者の約2倍になることが判明した．

この結果は，従来の漠然とした概念に数値的な裏付けを与えるものである．

2. 核医学検査が経過観察に有効であった脾損傷の一例

大石こずえ　那須　政司　鈴木　豊
（東海大・放）

近年，外傷性脾損傷では，脾摘後に起こる免疫能の低下や自然治癒・修復などの観点から，保存的治療が選ばれるようになってきている．

今回われわれは外傷後保存的治療での経過観察中 RI 検査で脾機能の再生を認めた一例を経験した．

症例は7歳女児，平成4年5月ブランコより転落し，本院受診．CT にて脾周囲と paracolic space に血腫を認め，脾破裂と診断された．入院中，脾は液状壊死を呈し，フチン酸シンチグラフィ上でも描出を認めなかった．

経過観察中4年後のフチン酸シンチにて，左下腹部と肝背側に RI の集積を認め，再生した脾臓あるいは副脾と考えた．血管造影では脾動脈からの血管によって造影される lesion が左下腹部にあり，RI での所見に一致していた．フチン酸シンチによる経過観察が有用であったと考えられた．

3. 副腎偶発腫における副腎シンチグラフィの役割

熊野　玲子　牧　正子　桑田　知
日下部きよ子　（東京女子医大・放）

副腎偶発腫における ^{131}I-Adosterol Scintigraphy の有用性を検討した．

対象は，副腎偶発腫と診断され，副腎シンチグラフィおよび摂取率測定を行った23例のうち，追跡調査できた17例である．

17例中，腫瘤への集積増加を認めた12例 (71%) では，全例手術 (5例，副腎皮質腺腫) や経過観察 (7例) にて良性と診断された．このうち，健側副腎の集積が低下し，抑制されていた例が5例みられ，Pre-Cushing 症候群が疑われた．

腫瘤への集積増加がみられなかった5例のうち，1例は副腎皮質癌，1例は肺葉外分画症の気管支原性嚢胞合併，3例は経過観察上良性と診断された．

Presented by Medical*Online